が極ッて二三日うちに婚禮已が往生づくめ其の執持よ

千「實說ですか此頃手製の電報なんぞがよく有りますよ伯父さん

百「己が貴樣に嘘を吐いて何にする千太郎少し勃然となり

千「デ私は如何して呉れます

百「お前には死か、ッた金持の後家を嫁に貰ッてやるとよ

千太郎は橫を向き頬りに腰のあたりなど擦ッて見

千「ハテナ己も麁匆かしいし夫に此頃は彼の一件で半夢中だから惡くすると親父と己とが間違ッたかも知れないハテナ伯父さんよく見て下さい私は確に千太郎でございませうな萬一親父の身躰と間違でも仕は致しませんか

百「よく似た顏では有るがお前の頭は黑し親父は白しするから間違の氣遣はない

千「夫が實說となッて見ると呆れも通り越して氣が遠くなるだけの話ですが伯父さん如何したものでせう

（トグンニヤリなる）

百「己が思ふには貴樣にも左樣いふ的が有るなら己から話て無理にも貰ッてやる事にし例の通りの親父の事だから物入の無いやうに寧そ親子一晩に婚禮二組片付けては如何だ

千「左樣でございますネ（ト考へる）

百「氣なしか

千「イエ大あり如何か左樣でも願ひませう

百「そして貴樣の方も矢張直掛合か

千「ヘ、お聿しながら双方一度に西洋で申す一目の戀と申すやつでヘ、如何も誠に（ト少しいきり出す）

（以下次號）

## 海城發電

泉鏡花

記者曰く鏡花泉君名は鏡太郎、明治六年十一月加州金澤に生る、十八にして京に出で、苦學精勵、著書若干あり、今本館に入て、編輯に從事す、

### 第一

「自分も實は白狀をさやうと思つたです。」

と汚れ垢着きたる制服を絡へる一名の赤十字社の看護員は靜に左右を顧みたり。

渠は淸國の富豪柳氏の家なる、奥まりたる一室に夥多の人數に取圍まれつゝ、倚子に懸りて卓に向へり。

渠を圍みたるは皆軍夫なり。

其十數名の軍夫の中に一人逞ましき漢あり、屹と彼の看護員に向ひ居れり。これ百人長なり。海野と謂ふ。

海野は年配三十八九、骨太なる手足飽くまで肥へて、身の丈もまた群を拔けり。

今看護員の請出だせる、其言を聽くと斉しく、

「何！白狀をさやうと思つたか。いや、實際味方の內情を、あの、敵に打明け樣としたんか。君。」

謂ふ言やゝあらかゝりき。

看護員は何氣なく、

「左樣です。撲つな、蹴るな、貴下酷いことをするぢやあゝりませんか。三日も飯を喰はさないで眠も眩むで居るものを、赤條々にして木の枝へ釣し上げてな、銃の臺尻で以て撲るです。ま、何うでしやう。餘り拷問が嚴しいので、自分もつひ苦しくつて堪りませんから、すつかり白狀をして、早く其苦痛を助りたいと思ひました。けれども、軍隊のことに就いては、何にも知つちやあ居ないので、赤十字の方ならば悉しいから、病院のことなんぞ、悉しく謂つて聞かして遣つたです。が、其樣なことは役に立たない。軍隊の樣子を白狀さろつて、益々酷く苛むです。實に苦しくつて堪らなかつたですけれども、知らないのが眞實だから謂へません。で、そう〳〵聞かさないでさまひましたが、いや、實に弱つたです。困りましたな、何うも支那人の野蠻なのにやあ。何しろ、まるでもつて赤十字なるものゝ組織を解さないで、自分等を何がなし、戰鬪員と同一に心得てるです。仕方がありませんな。」

と恰も親友に對して身の上談話をなすが如く、渠は平氣に物語れり。

然るに海野はこれを聞きて、不心服なる色ありき。

「ぢやあ何だな、知つてれば味方の內情を、殘らず

饒舌ッちまう處だつたな。」

看護員は輕く答へたり。

「いかにも。拷問が酷かつたです。」

百人長は憤然として、

「何だ。其でも生命があるでないか。譬ひ肉が爛れやうが、さ、皮が裂けやうがだ、呼吸があつたくらゐの拷問なら大抵知れたもんでないか。それに、苟も神州男兒で、殊に戰地にある御互だ。何んなことがあらうとも、謂ふまじいことを、何、撲られた位で痛いと謂ふて、味方の內情を白狀しやうとする腰抜が何處に在るか。勿論、白狀はしなかつたさ。白狀はしなかつたに違無いが、自分で、知つてれば謂はうと謂ふのが、既に我が同胞の心で無い。敵に內通も同一だ。」

と謂ひつゝ海野は一步を進めて、更に看護員を一睨せり。

看護員は落着濟まして、

「いや、自分は何も敵に捕へられた時、軍隊の事情を謂つては不可ぬ、拷問を堅忍して、秘密を守れと謂ふ、訓令を請けた事も無く、それを誓つた覺も無いです。また全く左樣でしやう、袖に赤十字の着いたものを、戰鬪員と同一取扱をしやうとは、自分はじめ、恐らく貴下方にしても思懸はしないでせう。」

「戰地だい、べらぼうめ。何を！、呑氣なことを謂やがんでい。」

軍夫の一人つか〳〵と立懸りぬ。百人長は應揚に左手を廣げて遮りつゝ、

「待て、えゝ、屁でもない喧嘩と違うぞ。裁判だ。罪が極つてから罰することだ。騷ぐない。噪々しい。」

軍夫は默して退きぬ。ぶつ〳〵口小言謂ひつゝありし、他の多くの軍夫等も、鳴を留めて靜まりぬ。

されど盡く不穩の色あり。眼光銳く、意氣激しく、いづれも拳に力を籠めつゝ、知らず〳〵肱を張りて、強ゐて沈靜を裝ひたる、一室にこの人數を容れて、燈火の光冷かに、殺氣を籠めて風寒く、滿州の天地初夜過ぎたり。

## 第二

「おい、其では濟むまい。よしむば、吾々同胞が、君に白狀をしろと謂つたからッて、日本人だ。むざ〳〵饒舌ると謂ふ法はあるまいぢや無いか、骨が砂利にならうとまゝよ。其をさう易々と、知つてれば白狀したものをなんのッて、面と向つて吾々に謂はれた義理か。え？何うだ。謂はれた義理では無からうで無いか。」

看護員は身を斜めにして、倚子に片手を投懸けつゝ、手にせる鉛筆を弄びて、

「いや。しかし大きに左樣かも知れません。」

と片頰を見せて橫を向きぬ。

海野は睜りたる眼を以て、避けし看護員の面を追ひたり。

「何だ、左樣かも知れません？これ、無責任の言語を吐いちやあ不可ぞ。」

またじり〳〵と詰寄りぬ。看護員は稍俯向きつ。手なる鉛筆の尖を嘗めて、筒服の膝に落書しながら、

「無責任？左樣ですか。」

時に海野は面を正し、警むるが如き口氣以て、

渠は少しも逆らはず、はた意に介せる狀も無し。

百人長は大に急きて、

「唯（左樣ですか）では濟まん。樣子に寄つてはこれ、屹と吾々に心得がある。きつかり性根を据へて返答せないか。」

「何樣な心得があるのです。」

看護員は顏を上げて、屹と海野に眼を合せぬ。

「一躰、自分が通行をして居る處を、何か待伏でもなすつた樣でしたな。貴下方大勢で、自分を擔ぐやうにして、此家へ引込むだは何ういふわけです。」

海野は今この反問に張合を得たりけむ、肩を搖りて氣競ひ懸れり。

「うむ、聞きたいことがあるからだ。心得はある。心得はあるが、先づ聞くことを聞いてからのことゝしやう。」

「は、それでは何か誰その吩附でゝもあるのですか。」

海野は傲然として、

「誰が人に頼まれるもんか。吾の了見で吾が聞くんだ。」

そんなぬらくらじや了見せんぞ、しつかりと返答しろ。」

唖々迫る百人長は太き仕込杖を手にしたり。

「それで何う謂へば無責任にならないです？」

「自分で其罪を償ふのだ。」

「それでは何うして償ひましやう。」

「敵情を謂へ！敵情を。」

と海野は少しく色解てどかと身重げに倚子に凭れり。

「聞けば、君が、不思議に敵陣から歸つて來て、係りの將校が、君の捕虜になつて居た間の經歴に就いて、尋問があつた時、特に敵情を語れと謂ふ、命令があつたそうだが、何ういふものか君は、知らない、存じませんの一點張で押通して、つまりそれなりで濟むだと謂ふが。え、君、二月も敵陣に居て、敵兵の看護をしたと謂ふでないか。それで、懇篤で、親切で、大層奴等のために盡力をしたさうで、敵將が君を歸す時、感謝狀を送つたさうだ。その位親任をされて居れば、種々内幕も聞いたらう、また、たゞ見たばかりでも大概は知れさうなもんだ。知つてゝ謂はないのは何ういふ譯だ。餘り愛國心がないではないか。」

「いえ、全く、聞いたのは呻吟聲ばかりで、見たのは繃帶ばかりです。」

## 第三

「何、繃帶と呻吟聲、其他は見も聞きも志ないんだ？可加減なことを謂へ。」

海野は苛立つ胸を押へて、務めて平和を保つに似たり。

看護員は實際其衷情を語るなるべし、聊も飾氣無く、

「全く、知らないです。謂つて利益になることなら、何秘すものですか。また些少も秘さねばならない必要も見出さないです。」

百人長は怪かし氣に、

「して見ると、何か、全然無神經で、敵の事情を探らうとはしなかつたな。」

「別に聞いて見やうとも思はないでした。」

と看護員は手を其額に加へたり。

海野は仕込杖以て床をつゝき、足蹈して口惜げに、

「無神經極まるじやあ無いか。敵情を探るためには斥候や、探偵が苦心に苦心を重ねてからに、命がけで目的を達しやうとして、十に八九は失策るのだ。それに最も安全な、最も便利な地位にあつて、まるでうつちやツて、や、聞かうとも思はない。無、無神經極まるなあ。」

と吐息して慨然たり。看護員は頸を撫でゝ打傾き、

「なるほど、左樣でした。閉だとそんな處まで氣が着いたんでしやうけれども、何しろ病傷兵の方にばかり氣を取られたので、ぬかつたです。些少も準備が整はないで、手當が行屆かないもんですから隨分繁忙を極めたです。五分と休む間もない位で、夜の目も合はさないで盡力したです。けれども、器具も、藥品も不完全なので、滿足に看護も出來ず、見殺にまたのが多いのですもの、敵情を探るなんて、なか〳〵何うして其處々まで、手が廻るものですか。」

と未だ謂ひも果ざるに、

「何だ、何だ。何だ。」

海野は獅子吼をなして、突立ちぬ。

「そりや、何の談話だ、誰に對する何奴の言だ。」

と噛着かむずる語勢なりき。

看護員は現在おのが身の如何に危險なる斷崖の端に臨みつゝあるかを、心着かざるもの、如く、無心——否寧ろ無邪氣——の躰にて、

「すべてこれが事實であるです。」

「何だ、事實！むゝ、味方のためには眼も耳も吝むで、問はず、聞かず、敵のためには粉骨碎身をして、夜の目も合はさない、呼吸もつかないで働いた、其が事實であるか！いや、感心だ、恐れ入つた。其位でなければ敵から感狀を頂戴する譯にはゆかんな。道理だ。」

と謂懸けて、夢見る如き對手の顏を、海野はじつと瞻りつゝ、嘲み笑ひて、聲太く、

「うむ、得難い豪傑だ。日本の名譽であらう。敵から感謝狀を送られたのは、恐らく君を措いて外にはあるまい。君も名譽と思ふであらうな。えらい！實にえらい！國の光だ。日本の花だ。吾々もあやかりたい。君、その大事の、いや、御秘藏のものではあらうが、何うぞ一番、其感謝狀を拜まして貰いたいな。」

と口は和らかにものいへども、胸に滿たる不快の念は、包むにあまりて音に出でぬ。

看護員は異議もなく、

「確かありましたッけ、お待ちなさい。」

手にせる鉛筆を納るとゝもに、衣兜の裡をさぐりつゝ、

「あ、ありました。」

と一通の書を取出して、

「なか〳〵字躰がうまいです。」

無雜作に差出して、海野の手に渡しながら、

「裂いちやあ不可ません。」

「いや、謹むで、拜見する。」

海野は故らに感謝狀を押戴き、書面を見ること久しかりし、やがてさら〳〵と繰廣げて、兩手に高く差翳しつ。聲を殺し、鳴を靜め、片唾を飲みて群りたる、多數の軍夫に掲げ示して、

「こいつを見い。貴樣達は何と思ふ、禮手紙だ。可か、支那人から禮をいつて寄越した文だぞ。人間は正直だ。わけもなく天窓を下げて、お辭義をする者は無い。殊に敵だ、吾々の敵たる支那人だ。支那人が禮をいつて捕虜を歸して寄越したのは、よく〳〵のことだと思へ！。」

いふことば半ばにして海野はまた感謝狀を取直し、くるりと押廻して背後なる一團の軍夫に示せし時、戶口に丈長き人物あり。頭巾黑く、外套黑く、面を蔽ひ、身躰を包みて、長靴を穿ちたるが、纔に頭を動かして、屹と其感謝狀に眼を注ぎつ。濃かなる一脈の煙は渠の唇邊を籠めて渦巻きつゝ葉卷の薫高かりけり。

## 第四

百人長は向直りて其言を續けたり。

「何と思ふ。意氣地もなく捕虜になつて、生命が惜さに降參して、昧方のことはうつちやつてな、支那人の介抱をした。其また盡力といふものが、一通りならないのだ。此中にも書いてある、宛然何だ、親か、兄弟にでも對するやうに、恐ろしく親切を盡して遣つてな、其で生命を助かつて、阿容々々と歸つて來て、剩へ此感狀を戴いた。何うだ、えらいでないか貴樣達なら何とする？」

と未だ謂ひもはてざるに、滿堂忽ち默を破りて、哄と諸聲をぞ立てたりける、喧譽名狀すべからず。國賊逆徒、賣國奴、殺せ、撲れと、衆口一齊熱罵啊喝を極めたる、思ひ〳〵の叫聲は、雜音意味も無き響となりて、騷然としてかまびすしく、あはや身の上ぞと見る眼危き、唯單身なる看護員は、冷々然として倚子に恁りつゝ。あたりを見たる眼配は、深夜時計の螺る時、病室に患者を護りて、油斷せざるに異ならざりき。看護員に害迫を加ゆべき軍夫等の意氣は絶頂に達しながら、百人長の手を掉りて頻りに一同を鎭むるにぞ、其命なきに前だちて決して毒手を下さゝるべく、豫て警むる處やありけん、地韜蹈みてたけり立つをも、夥間同志が抑制して、拳を押へ、腕を扼して、野分は無事に吹去りぬ。海野は感謝狀を卷き戻し、卓子の上に押遣りて、

「それでは返す。しかしこの感謝狀のために、血のある奴等が如彼に騷ぐ。殺せの、撲れのと謂ふ氣組だ。うむ、矢張取つて置くか。引裂いて踏むだら何うだ。さうすりや些少あ念ばらしになつて、いくらか彼奴らが合點しやう。さうでないと、彼でも御國のためには、生命も惜まない徒だから、何んなことをしやうも知れない。よく思案して請取るんだ、可か。」

耳にしながら看護員は、事もなげに手に取りて、海野が言の途切れざるに、敵より得たる感謝狀は早くも衣兜に納まりぬ。

「取つたな。」　と叫びたる、海野の聲の普通ならざるに、看護員は怪む如く、

「不可ないですか。」

「貝心に問へー」

「やましいことは些少もないです。」

いと潔く謂放ちぬ。其面貌の無邪氣なる、其謂ふことの淀泊なる、要するに看護員は、他の誘惑に動かされて、胸中其是非に迷ふが如き、さる心弱きものにはあらず、何等か固き信仰ありて、譬ひ其信仰の迷へるにもせよ、斷々乎一種他の力の如何とも爲難きものありて存せるならむ。

海野は其答を聞く毎に、呆れもし、怒りもし、苛立ちもしたりけるが、眞個天眞なる狀見えて言を飾るとは思はれざるにぞ、これ實に白痴者なるかを疑ひつゝ、一應試に愛國の何たるかを敎え見むとや、少しく色を和げる、重きものいひの溢勝にも、

「やましいことがないでもあるまい。考へて見るが可。第一敵のために虜にされると謂ふがあるか。抵抗してかなはなかつたら、何故切腹をしなかつた。苟も神州男兒だ、腸を摑み出して、敵の面やツ面へたゝきつけて遣るべき處だ。其も可、時と塲合で捕はれないにも限らんが、撲られて痛いからツて、平氣で味方の內情を白狀しやうとは、呆れ果た腰抜だ。其上まだ親切に支那人の看護をしてな、高慢らしく盡力をした吹聽もないもんだ。のみならず、一旦恥辱を蒙つて、吾々同胞の面汚をして居ながら、洒亞つくで歸つて來て、感狀を頂きは何といふ心得だ。せめて土產に敵情でも探つて來れば、まだ言譯もあるんだが、刻苦して探つても敵の用心が嚴しくつて、殘念ながら分らなかつたといふならまだも恕すべきであるに、先に將校に撿べられた時も、前刻吾が聞いた時も、いひやうもあらうものを、敵情なんざ聞かうとも、見やうとも思はなかつたは、實に驚く。然も敵兵の介抱が急がしいので、其樣なことあ考へてる隙もなかつたなんぞと、憶面もなく謂ふ如きに至つては言語同斷と謂はざるを得ん。國賊だ、賣國奴だ、疑つて見た日にやあ、敵に內通をして、我軍の探偵に來たのかも知れない、と言はれた處で仔方がないぞ。」

## 第五

「然もなければ、あの野蠻な、殘酷な敵がさう易々捕虜を返す法はない。然しそれには證據がない、强て敵に內通をしたとは謂はん、が、既に國民の國民たる精神の無い奴を、其まゝにして見遁がしては、我軍の元氣の消長に關するから、屹と改悔の點を認むるか、さもなくば相當の制裁を加へなければならん。勿論軍律を犯したと謂ふでもないから、將校方は何の沙汰をもせられなかつたのであらう。けれどもが、吾々父母妻子をうつちやつて、御國のために盡さうと謂ふ愛國の死士が承知せん。此室に居るものは、皆な君の所置振に嫌焉たらざるものがあるから、將校方は默許なされても、其樣な國賊は、屹と談じて、懲戒を加ゆるために、おの〳〵決する處があるぞ。可か。其惡むべき感謝狀を、斯う謂つた上でも、裂いて棄てんか。やつぱり疚ましいことはないか、些少も良心が咎めないか、それが聞きたい。ぬらくらの返事をしちやあ不可ぞ。」

看護員は傾聽して、深く其言を味ひつゝ、默然として身動きだもせず、良猶豫ひて言はざりき。

こなたはまたり顏に附入りぬ。

「屹と責任のある返答を、此室に居る皆に聞かしてもちはう。」

謂ひつゝ左右を眴したり。

軍夫の一人は叫び出せり。「先生。」

渠等は親方といはざりき。海野は老壯士なればなり。

「先生、はやくしておくむなせえ。いざこざは面倒でさ。」

「撲つちまへ！」　と呼ばゝるものあり。

「隊長、おい、魂を据へて返答しろよ。へむ、何うするか見やあがれ。」

「腰拔め、口イきくが最後だぞ。」

と口々にまたひしめきつ。四五名の足のばた〳〵と床板を踏鳴らす音ぞ聞こえたる。

看護員は、海野がいはゆる腕力の今ははや其身に加へらるべきを解したらむ。然れども渠は聊も心に疚ましきことなかりけむ、胸苦しき氣振もなく、靜に海野に打向ひて、

「些少も良心に恥ぢないです。」

輕く答へて自若たりき。

「何、恥ぢない。」

と謂返して海野は眼を瞬りたり。

「もう一度、屹とやましい處はないか。」

看護員は微笑みながら、

「繰返すに及びません。」

其信仰や極めて確乎たるものにてありしなり。海野は熱し詰めて拳を握りつ。容易くはものゝ得いはで唯、唯、渠を睨まへ詰めぬ。

時に看護員は從容として、

「戰鬪員とは違ひます、自分をお責めなさるんなら、赤十字社の看護員として、そしておはなしが願ひたいです。」

謂ひ懸けて片頰笑みつ。

「敵の內情を探るには、たしか軍事探偵といふのがある筈です。一躰戰鬪力のないものは敵に抵抗する力がないので、遁げられれば遁げるんですが、行り損なへばつかまるです。自分の職務上、病傷兵を救護するには、敵だの、味方だの、日本だの、清國だのといふ、左樣な名稱も區別も無いです。唯病傷兵のあるばかりで、其他には何にもないです。丁度自分が捕虜になつて、敵陣に居ました間に、幸ひ依頼をうけましたから、敵の病兵を預りました。出來得る限り盡力をして、好結果を得ませんと、赤十字の名折になる。いや名折は構はないでもつまり職務の落度となるです。しかしさつきもいひます通り、我軍と違つて實に可哀想だと思ひます。氣の毒なくらゐ萬事が不整頓で、とても手が屆かないので、やゝともすれば見殺しです。でもそれでは濟まないので、大變に苦勞をして、やう〳〵赤十字の看護員といふ躰面だけは保つことが出來ました。感謝狀は先づ其しるしといつていゝやうなもので、これを國への土產にすると、全國の社員は皆滿足に思ふです。既に自分の職務さへ、辛うじて務めたほどのものが、何の餘裕があつて、敵情を探るなんて、探偵や、斥候の職分が兼ねられます。またよしんば兼ねることが出來るにしても、其は餘計なお世話であるです。今貴下にお談し申すことも、お檢べになつた將校方にいつたことも、全くこれにちがひはないのでこのほかにいふことは知らないです。毀譽褒貶は仕方がない、遊賊でも國賊でも、それは何でもかまはないです。唯

## 第六

看護員でさへあれば可。しかし看護員たる躰面を失つたとでもいふことなら、辨解も致します、罪にも服します、責任も荷ふです。けれども愛國心が何うであるの、敵愾心が何うであるのと、左樣なことには關係しません。自分は赤十字の看護員です。」

と淀みなく陳べたりける。看護員の其言語には、更に仰揚と頓挫なかりき。

見る〳〵百人長は色激して、碎けよとばかり仕込杖を握り詰めしが、思ふこと亂麻胸を衝きて、反駁の緒を發見し得ず、小鼻と、髯のみ動かして、忽ち返りて見えたりける。時に一人の軍夫あり、

「畜生、好なことを謂つてやがらあ。」

聲高に叫びざま、足疾に進出て、看護員の傍に接し、其面を覗きつゝ、

「おい、隊長、色男の隊長、何うだ。へむ、しらばくれはよしてくれ。其惡濟ましが氣に喰はねえんだい。赤十字社とか看護員とかッて、べらんめい、漢語なん

かつかいやあがつて、何でえ、躰よく言扱けやうとしたつて駄目だぜ。おいらア皆な知てるぞ、間抜めい。へむ畜生、支那の捕虜になるやうぢやあとても日本で色の出來ねえ奴だ。唐人の阿魔なんぞに惚れられやあがつてこの合の子め。手前、何だとか、彼だとかいふけれどな、南京に惚れられたもんだから、其で支那の介抱をしたり、贔負をしたりして、内幕を知つてゝもいはねえんぢやあ無えか。かう、おいらの口は浄玻璃だぜ。おいらあ初中知つてるんだ。おい皆聞かつし、初手はな、支那人の金滿が流丸を喰つて路傍に僵れて居たのを、中隊長樣が可愛想だつてえんで、お手當をなすつてよ、此奴に其家まで送らしてお遣んなすつたのがはじまりだ。するとお前其支那人を介抱して送り届けて歸りしなに、支那人の兵隊が押込むだらう。面くらいやあがつてつかまる處をな、金滿の奴さん恩儀を思つて、無性に難有がつてる處だから、きわどい處を押隱して、やう〳〵人目を忍ばしたが、大勢推込むで居るもんだから、秘しきれねえでとう〳〵奥の奥の奥ウの處の、女の部屋へ秘したのよ。ね、隱れて五日ばかり對向ひで居るあひだに、何でも其女が惚れたんだ。無茶におツこちたと思ひねえ。五日目に支那の兵が退いてく時つかめえられてまよびかれた。何でも其日のこつた。おいら五六人で宿營地へ急ぐ途中、酷く吹雪く日で眼も口もあかね〳〵雪ン中に打倒れの、半分埋まつて、ひきつけて居た婦人があつたい。謂つて見りや支那人の片割ではあるけれど、婦人だから、ねえ、おい、撫ふめえと思つて焚火であつためて遣ると活返つた李花てえ女で、此奴がエテよ。別離苦に一目てえんで唯一人駈出してさ、吹雪僵になつたんだとよ。そりや後で分つたが、其ン時あ、おいらツちが負つて家まで届けて遣つた。其因縁でおいら一寸々々父親の何とかてえ支那の家へ出入をするから、悉しいことを知つてるんだ。女はな、ものずきじやあねえか、この野郎が戀しいとつて、それつきり床着いてよ、何うだい、此頃じやもう湯も、水も通らねえツさ。父親なんざ氣を揉んで銃創もまだすつかりよくならねえのに、此奴の音信を聞かうとつて、旅團本部へ日參だ。だからもう皆がうす〳〵知つてるぜ。つい隊長樣なんぞのお耳へ入つて、御存じだから、おい奴さむ。お前お擒の時も其お談話をなすつたらう。ほんによ、お前がそんねえな腰抜たあ知られねえから、勿躰ねえ、隊長樣までが、あゝ、可哀想だ、其女の父親とか眼を懸けて遣はせとおつしやらあ、恐しい冥加だぜ。お前そんなことも思はねえで、べん〳〵と支那兵の介抱をして、お禮をもらつて、恥かしくもなく、のんこのしやあで、唯今と歸つて來は何ういふ了見だ。はじめに可哀想だと思つたほど、憎くてならねえ。支那の探偵になるやうな奴ア大和魂を知られねえ奴だ、大和魂を知られねえ奴あ日本人のなかまでなけりや支那人も同一だ。どつッ腹あ蹴破つて、このあたを引ずり出して、嚙潰して吐出すんだい！」

「其處だ！」

と海野は一喝して、はたと卓子を一打せり。恁りし間他の軍夫は、屢〻同情の意を表して、舌者の聲を打消すばかり、熱罵を極めて威嚇しつ。

楚歌一身に聚りて集合せる腕力の次第に迫るにも關はらず宇眉一點の懸念なく、いと晴々しき面色にて、渠は春晝寂たる時、無聊に堪えざるものゝ如く、片膝を片膝に其片膝を、また片膝に、交る〳〵投懸けては、其都度靴音を立つるのみ。胸中おのづから閑ある如し。

蓋し赤十字社の元素たる、博愛のいかなるものなるかを信ずること、渠の如きにあらざるよりは、到底これ保ち得難き度量ならずや。

「其處だ。」と今卓子を打てる百人長は大に決する處ありけむ、屹と看護員に立向ひて、

「無神經でも、おい、先刻からこの軍夫の謂ふたことは多少耳へ入つたらうな。何うだ、衆目の見る處、貴樣は國躰のいかむを解さない非義、劣等の怯奴である、國賊である、破廉恥、無氣力の人外である。皆が貴樣を以て日本人たる資格の無いものと斷定したが、何うだ。其でも良心に恥ぢないか。」

「恥ぢないです」と看護員は聲に應じて答へたり。

百人長は頷きぬ。

「可、改めて謂へ、名を聞かう。」

「名ですか、神崎愛三郎。」

## 第七

「うむ、それでは神崎、現在居る、此處は一躰何處だと思ふか。」

海野は太くあらたまりてさもものありげに問懸けたり。問はれて室内を眴しながら、

「左樣、何處か見覺えて居るやうな氣持もするです。」

「うむ分るまい。其が分つて居さへすりや、口廣いことは謂へないわけだ。」

顏に苦むしたる髯を撫でつゝ、立ちはだかりたる身の丈豐かに神崎を瞰下ろしたり。

「此處はな、柳が家だ。貴樣に惚れて居る李花の家だぞ。」

今經歷を語りたりし軍夫と眼と眼を見合はして二人はニタリと微笑めり。

神崎は夢の裡なる面色にてうつとりと其眼を睜りぬ。

「ぼんやりするない。柳が住居だ。女の家だぞ。聞くことがありや何處でも聞かれるが、故と此處ん處へ引張つて來たのには、何か吾々に思ふ處がなければならない。其位なことは、いくら無神經な男でも分るだらう。家族は皆追出してしまつて、李花は吾々の手の内のものだ。それだけ豫め斷つて置く、可か。

さ、斯う斷つた上でも、矢張り看護員は看護員で、看護員だけのことをさへすれば可、寧ろ他のことは爲ない方が當前だ。敵情を探るのは探偵の係で、戰にあたるものは戰鬪員に限る、いふて見れば、敵愾心を起すのは常業のない閑人で、進で國家に盡すのは好事家がすることだ。人は自分のすべきことをさへすれば可、吾々が貴樣を責めるのも、勿論のこと、ひまだからだ、と煎じ詰めた處、さういふのだな。」

神崎は猶豫らはで、

「左樣、自分は看護員です。」

この冷かなる答を得て百人長は決意の色あり。

「しつかり聞かう、職務外のことは、何にもせんか！」

「出來ないです。餘裕があれば綿織糸を造るです。」

應答はこれにて決せり。

百人長はいふこと盡きぬ。

海野は悲痛の聲を擧げて、

「駄目だ。殺しても何にもならない。可、いま一ツの手段を取らう。權！吉！熊！一件だ。」

聲に應じて三名の壯俊は群を脫して。戶口に向へり。時に出口の板戶を背にして、木像の如く突立ちたるまゝ兩手を衣兜にぬくめつゝ、身動きもせで煙草をのみたる彼の眞黑なる人物は、靴音高く歩を轉じて、渠等を室外に出しやりたり。三人は走り行きぬ。走り行きたる三人の軍夫は、二人左右より兩手を取り、一人後より背を推して、端麗多く世に類なき一個清國の婦人の年少なるを、荒けなく引立て來りて、海野の傍に推据へたる、李花は病臥にあれりしなる、同じ我家の内ながら、渠は深窓に養はれて、浮世の風は知らざる身の、爾く此室に出だたるも恐らく其日が最初ならむ、長き病に傷窶れて、寢衣の姿なよ〳〵しく、鐙の花も萎みたる流罪の天女憐むべし。

「國賊！」

と呼懸けつ。百人長は猿臂を伸ばして美しき犧牲の、白き頸を掻摑み、其面をば仰けざまに神崎の顏に押向けぬ。

李花は猛獸に手を取られ、毒蛇に膚を絡はれて、恐怖の念もあらざるまで、遊魂半ば天に朝して、夢現の境にさまよひながらも、神崎を一目見るより、やせたる頰をさとあかめつ。またゝきもせで見詰めたりしが、俄に總の身を震はして、

「あ。」

と一聲血を絞れる、不意の叫聲に驚きて、思はず軍夫が放てる手に、身を支へたる力を失して後居にはたと僵れたり。

看護員は我にもあらで衝と其倚子より坐を立ちぬ。

百人長は毛脛をかゝげて、李花の腹部を無手と蹈まへ、ぢろりと此方を流眄に懸けたり。

「何うだ。これでも、これでも、職務外のことをせ

ねばならない必要を感ぜんか。」

同時に軍夫の一團はばら〳〵と立懸りて、李花の手足を壓伏せぬ。

「國賊！これで何うだ。」

海野はみづから手を下ろして、李花が寢衣の袴の裾をびり〳〵とばかり裂けり。

## 第八

時に彼の黒衣長身の人物は、ハタと煙管を取落しつ、其方を見向ける頭巾の裡に一双の眼爛々たりき。あはれ、看護員はいかにせしぞ。

面の色は變へたれども、胸中無量の絶痛は、少しも擧動に露はさで、渠はなほよく靜を保ち、徐ろに其筒服を拂ひ、頭髪のやゝのびて、白き額に垂れたるを、左手にやをら掻上げつゝ、卓の上に差置きたる帽を片手に取ると齊しく、肅然と身を起して、

「諸君。」

とばかり言ひすてつ。

海野と軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫の隙より、眞白く細き手の指の、のびつ、屈みつ、洩れたるを、纔に一目見たるのみ。靴音輕く歩を移して、其まゝ李花に辭し去りたり。

恁て五分時を經たりし後は、失望したる愛國の志士と、及び其腕力と、皆疾く室を立去りて、暗澹たる孤燈の影に、李花のなきがらぞ蒼かりける。此時までも目を放たで直立したりし黒衣の人は、濶歩坐中に動ぎ出て、燈火を仰ぎ李花に俯して、嚴然として倚子に凭り、卓子に片肱附きて、眼光一閃鉛筆の尖を透し見つ。電信用紙にサラ〳〵と、

月　日、　海城發

予は目撃せり。

日本軍の中には赤十字の義務を完して、敵より感謝狀を送られたる國賊あり。然れどもまた敵愾心のために清國の病婦を捉へて、犯し辱めたる愛國の軍夫あり。委細はあとより。

じよん、べるとん

英國ロンドン府

アクリー、テレグラフ社編輯行

（完）

# 天傳

## 宇都宮釣天井考

櫻痴居士

**○本多上野介謀叛の妄説**

本多上野介と云へば。世人慨ぬ宇都宮釣天井の事を以てす。其説に曰く『元和八年德川大將軍第二世秀忠公台德院殿日光の社に參するの途次。宇都宮城に宿す。城主本多上野介正純は。陰に平岩主計頭と相謀り。儲君家光公猷院殿を廢し。駿河大納言忠長第二子秀忠公の世の將軍たらしむるの異志を懷き。秀忠公を弑せんと謀り。浴室の天井および板羽目を二重に爲し。將軍の入浴を待ちて之を壓死せしむるの企を爲せり。井伊掃部頭これを偵知し。密に將軍に啓し。徹夜江戸に還城なし參らせ。其後上野介の罪を糺して之を出羽に配流せしめたり』と云々。坊間に傳ふる大久保武藏鐙と題せる書中の宇都宮釣天井記を初として。此説を以て。三

天井謀叛の事たる。固より妄誕の虚説たるは論を俟たざるとなりと雖ども。本多上野介改易の當時よりして。斯る妄説は世上に流布して。恰も實説の如く傳へたるを以て。新井白石も藩翰譜に於て殊更に此事を辯ぜられたり。以て此妄説の近時に搆造せられたるに非ざるを知るべきなり。」且夫秀忠が上野介正純謀叛の企ありとの密報に驚き玉ひ。宇都宮の止宿を變へて。急に江戸に還城ありし事。および本多上野介が宇都宮を沒收せられて配流に處せられたる事も。倶に事實にして。史家が曾て其事情を明かにせざりし所なれば。此事たる實に二百年間の疑案たり。余は淺聞寡識敢て此考究に當るの資に非ずと雖ども。聊か見聞する所に據りて。當時の事情を覈察し。以て讀者諸君の消閑に供し。併せて誨を乞はんと欲す。

先づ本多上野介が平岩主計頭と相謀りたると云へるは妄説なり。平岩主計頭親吉が卒去したるは慶長十六年十月晦日にして（廢絶録）元和八年を距る十一年前の事なり。而して慶長十六年には國千代（駿河大納言忠長の幼名）七歳にして。未だ江戸城の後宮に養育せられたりし時なりとぞ。（國千代は其後、元和四年に加冠して忠長と名乘り。十四歳甲斐國を賜ひ。同き六年に四位少將。十六歳同九年に三位中納